KJS

京都社会学年報

第 27 号
2019年12月

〈論　　文〉

高学歴化は「職場の花」を解放したか？　山本　耕平
——「女の子資本」仮説の検証から見る事務職におけるジェンダー秩序の持続——

過疎地域における祭りの終了と再生のメカニズム　井口　　暁
—— 三重県神川町の「桜祭り」から「桜覧会」への転換に注目して ——

家族主義福祉レジーム諸国における育児の脱家族化　大木香菜江
—— 日本とイタリアの育児政策比較研究 ——

社会的包摂策変容の可能性　八鍬加容子
——「ビッグイシュー」を事例として ——

〈書評論文〉

「存在論的転回」考　鈴木　赳生
Martin Holbraad and Morten Axel Pedersen,
The Ontological Turn: Anthropological Exposition
（Cambridge University Press, 2017）

イスラモフォビア　山下　泰幸
—— フランスのエリートたちが「ムスリム問題」をいかに構築するか ——
Abdellali Hajjat et Marwan Mohammed,
Islamophobie:
Comment les élites françaises fabriquent le « problème musulman »
（La Découverte, [2013] 2016）

ソーシャル・メディアと道徳　宋　　円夢
—— 自己コントロールの喪失 ——
Lisa S. Nelson,
Social Media and Morality: Losing Our Self Control
（Cambridge University Press, 2018）

〈論文翻訳〉

『ケルン社会学・社会心理学雑誌』（*KZfSS*）にみる社会学の歴史（下）
シュテファン・メビウス
梅村　麦生　訳

27　京都大学文学部社会学研究室

［編集規定］

1．本誌は京都大学大学院文学研究科行動文化学系社会学研究室の機関誌として、年１回発行する。

2．１）本誌の編集は、「京都社会学年報」編集委員会の責任のもとに行われる。

２）編集委員会は本研究室の教員および大学院生代表者により構成される。

３）編集委員会に関するその他の細目は別に定める。

3．本誌には、研究論文のほかに、書評論文、資料等の欄を設ける。

4．１）本誌の投稿者は、原則として京都大学大学院文学研究科行動文化学系社会学研究室に所属する専任および非常勤の教員、ならびに大学院生・研修員、研究生とする。

２）投稿に関する細目は別に定める。

5．論文等は、未公刊のものに限る。

6．論文等は、編集委員会によって審査され、その掲載について検討される。

7．本誌に掲載された原稿の著作権は、社会学研究室に帰属するものとする。著作者が本誌に掲載された文章を再録しようとする場合は、事前に本研究室に届けでる。

8．１）論文等の原稿は、所定の執筆要項に準拠したものに限る。

２）執筆要項は別に定める。

京都社会学年報

第27号

京都大学文学部社会学研究室　2019年12月

目　次

〈論　　文〉

高学歴化は「職場の花」を解放したか？　山本　耕平　1
——「女の子資本」仮説の検証から見る事務職におけるジェンダー秩序の持続——

過疎地域における祭りの終了と再生のメカニズム　井口　　暁　19
—— 三重県神川町の「桜祭り」から「桜覧会」への転換に注目して ——

家族主義福祉レジーム諸国における育児の脱家族化　大木香菜江　45
—— 日本とイタリアの育児政策比較研究 ——

社会的包摂策変容の可能性　八鍬加容子　69
——「ビッグイシュー」を事例として ——

〈書評論文〉

「存在論的転回」考　鈴木　赳生　95
Martin Holbraad and Morten Axel Pedersen,
The Ontological Turn: Anthropological Exposition
（Cambridge University Press, 2017）

イスラモフォビア　山下　泰幸　103
—— フランスのエリートたちが「ムスリム問題」をいかに構築するか ——
Abdellali Hajjat et Marwan Mohammed,
Islamophobie:
Comment les élites françaises fabriquent le « problème musulman »
（La Découverte, [2013] 2016）

ソーシャル・メディアと道徳　宋　　円夢　111
—— 自己コントロールの喪失 ——
Lisa S. Nelson,
Social Media and Morality: Losing Our Self Control
（Cambridge University Press, 2018）

〈論文翻訳〉

『ケルン社会学・社会心理学雑誌』（*KZfSS*）にみる社会学の歴史（下）
シュテファン・メビウス
梅村　麦生　訳　119

〈執筆者紹介〉（掲載順）

インターネットが利用可能な方は、社会学研究室ホームページ（http://www.socio.kyoto-u.ac.jp/）をご参照ください。

山本　耕平
非常勤講師

科学社会学、社会階層論、計量社会学
現在の研究テーマ：女性の高等教育と労働・キャリア、科学にたいする態度
山本耕平、2019、「疑似科学への態度の規定要因に関する諸仮説の検証――科学的知識・剥奪・権威主義」『年報 科学・技術・社会』28: 25-46.
E-mail: koheiyamamoto224@gmail.com

井口　暁
日本学術振興会特別研究員 PD

リスク社会論、コミュニケーション論、ルーマン研究
著書に『ポスト 3・11 のリスク社会学――原発事故と放射線リスクはどのように語られたのか』（ナカニシヤ出版、2019）がある。主な論文に「リスクと危険の帰属をめぐるコンフリクト」（『ソシオロジ』、2014）、「ルーマンの政治理論は何を目指したのか（上・下）」（『京都社会学年報』、2014、2015）、「異質性を基礎とした協同形式としての了解」（『ソシオロジ』、2017）などがある。
E-mail:siguchi05@gmail.com

大木　香菜江
博士後期課程 1 年次

家族社会学・福祉国家比較研究
現在の研究テーマ：家族主義福祉レジームの脱家族化

八鍬　加容子
博士後期課程 1 年次

都市社会学、貧困研究、ライフストーリー論
現在の研究テーマ：「ビッグイシュー」を中心に、都市における他者との協働について

鈴木　赳生
博士後期課程 3 年次・日本学術振興会特別研究員 DC2

知識生産・批判理論
現在の研究テーマ：多文化主義思想の批判的再検討

山下　泰幸
日本学術振興会特別研究員 DC

マイノリティ研究、レイシズム研究
現在の研究テーマ：社会・経済的に成功するフランスの北アフリカ系移民二世のイスラーム教徒について

宋　円夢
修士課程 1 年次

家族社会学、メディア社会学
現在の研究テーマ：中国における「二人っ子政策」以後メディアによって構築された子供と女性のイメージの現実的な影響についての考察
E-mail: songyuanmeng1@gmail.com

梅村　麦生
日本学術振興会特別研究員 PD

理論社会学、社会学説史
現在の研究テーマ：時間の社会学、ドイツ語圏の社会学史・社会科学史
E-mail: umemuramugio@gmail.com

編集後記

▼今号は前号に続き、計8本の論文・書評論文・論文翻訳を掲載することができました。『京都社会学年報』は、社会学研究室の院生が主体となって作る学術雑誌として、1994年に創刊され、多くの院生やOB/OGの協力によって維持されてきました。編集作業においても、これまでの編集委員の試行錯誤と努力の積み重ねにより、作業工程が整えられています。今年度は、執筆要項の特殊なルールを一部廃止し、よりシンプルで投稿しやすい形を目指しました。しかしながら、近年は博士課程の院生の多くが海外に留学することから、安定して作業をおこなえる人員の不足が深刻になってきました。今後、投稿者だけでなく編集委員についても、多くの院生が関わる方法を検討する必要があるかもしれません。最後に、コメンテーター等でご支援をいただきました研究室内外のみなさまへ、心よりお礼申し上げます。

第27号編集委員　D1　河原優子
D1　八鍬加容子　M1　吉智博

▼『京都社会学年報』27号をお届けします。本誌の創刊は1994年のことでした。修士課程の入学者が1名から3名程度だった時代から、1996年の文学研究科の大学院重点化への移行にともなって多い時には1年に10名近い修士の院生が加わる時代となりました。その後国立大学の独法化、運営交付金と教職員の定員削減、さらに若手教員のポスト減少や任期付き雇用といった厳しい環境のなかで、現在の大学院生たちは調査・研究に奮闘しています。

▼研究テーマはそれぞれの時代を反映して大きく変化していくのが常ですが、この10年間の『年報』に掲載された論文44本をみると、雇用・労働・格差（9本）を筆頭に、文化・エスニシティ・移民（6本）がつづき、社会学史・理論、ジェンダー・セクシュアリティ、家族が5本ずつという状況です。方法論的にみると、数理・計量の手法を使った論文が11本、インタビューやフィールドワークに基づく論文が11本と同数になっています。これは創刊最初期の三年間と比べると大きく変わってきています。創刊三年間（1994～1996年）に掲載された論文は全部で19本でしたが、数理・計量の手法を用いた論文は皆無でした。フィールド調査による論文は5本ありました。しかし特筆すべきは、社会学史や社会・理論などの文献理論研究が9本と圧倒的多数を占めていました。こうした移り変わりをみると、現在の京大社会学の強みと課題も見えてくるようです。

『京都社会学年報』編集代表　松田素二

〈査読委員〉
松田素二　落合恵美子　太郎丸博　田中紀行　ステファン・ハイム　安里和晃　丸山里美

京都社会学年報　第27号

2019年12月25日発行

編　集　京都社会学年報編集委員会
（編集代表　松田 素二）
発　行　京都大学大学院文学研究科社会学研究室
〒606-8501　京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-2758　FAX 075-753-2836
製　作　株式会社 田中プリント
〒600-8047　京都市下京区松原通麩屋町東入
TEL 075-343-0006　FAX 075-341-4476

この本はそのまま読むことが困難な方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「拡大写本」等の読書代替物への媒体変換を行うことは自由です。製作の後は発行人へご連絡をください。

《Editorial Regulations》

1. This journal is an annual publication of the Department of Sociology, Graduate School of Letters, Kyoto University, Kyoto, Japan.
2. i) This jounal is edited by the Editorial Board of the Kyoto Journal of Sociology.
   ii) The Board consists of the professors and postgraduates of the Sociology Department.
   iii) Detailes of the regulations of the Board are specially provided.
3. Contributions to this journal may be in the form of articles, review essays, etc.
4. i) Contributors are generally limited to professors and postgraduates of the Department of Sociology, Graduate School of Letters, Kyoto University.
   ii) Guidelines for contributors are specially provided.
5. Contributions are limited to previously unpublished articles.
6. Review of contributions is carried out by the Editorial Board.
7. The copyright for each article included in KJS belongs to the Department of Sociology. In cases any article published in KJS is reproduced elsewhere, the author should notify the Department in writing.
8. i) Manuscripts submitted for review must follow the writing guidelines for contributors.
   ii) The writing guidelines for contributors are specially provided.

KJS

Kyoto Journal of Sociology

No.27 December 2019

ARTICLES

Changed but Unchanged?
Educational Expansion, Fields of Study, and Women's Entry into White-Collar Jobs
Kohei YAMAMOTO

Transformation of the Festival and Community Conflict
Satoshi IGUCHI

De-familialization of Childcare in a Familialistic Welfare State:
A Comparative Research Study of Childcare Policies in Japan and Italy
Kanae OHKI

A New Approach to Social Inclusion:
The Case of The Big Issue Japan
Kayoko YAKUWA

REVIEW ESSAYS

Martin Holbraad and Morten Axel Pedersen,
The Ontological Turn: Anthropological Exposition
(Cambridge University Press, 2017) Takeo SUZUKI

Abdellali Hajjat et Marwan Mohammed,
Islamophobie:
Comment les élites françaises fabriquent le « problème musulman »
(La Découverte, [2013] 2016) Yasuyuki YAMASHITA

Lisa S. Nelson,
Social Media and Morality: Losing Our Self Control
(Cambridge University Press, 2018) Yuanmeng SONG

ARTICLE TRANSLATION

Stephan MOEBIUS,
Die Geschichte der Soziologie im Spiegel der *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* (*KZfSS*) (Japanese translation, 2nd part)
Mugio UMEMURA

Department of Sociology, Faculty of Letters,
Kyoto University, Kyoto,606-8501,Japan

27